

Title	震災後の悲しい[追]憶
Author(s)	小川, [琢]治
Citation	地球 (1924), 1(4-5): 382-384
Issue Date	1924-05-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/182661">http://hdl.handle.net/2433/182661</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## 震災後の悲しい追憶

小川 琢 治

第一卷

第四・五號

三八三

九六

れる間に、深夜時に東山方面に地鳴りが聞へ、將軍塚鳴動の歴史上の記事の無稽ならざるを語られた記憶があつて、全くデブキソン氏と同感である。

大森原、神保の三教授を東西兩大學が失つたのは我々が震災の大變後に遭遇した最も悲しい事件である。地震の大森博士として兒童走卒に知られた世界的學者が此の事變に萬里の波瀾を隔て、歐洲に在つたのは當時の我々の最も遺憾とし最も頼りなく感じた所であつたが、何ぞ圖らん繼かに大患を冒して歸朝せられた後に再び其の精透の觀察と周密の研究とを此の噴古の地變に試みらるゝの天壽を享けられず、寢寐共に忘れられざりし問題を跡に遺して永眠せられんとは。此の遺憾は日本國民の識るものも識らざるものも共に我々を感へ同じくすべきを疑はぬ大森博士が關谷博士の衣鉢を襲いだ後に内外に起つた地震さといふ地震ごに其の發言は最大の權威として世界の耳目を聳動せしめた。近刊英版地震學(デブキソン著)の如きは殆んど博士の研究結果の綜括といつてもよい位に典據の第一に置いたのは怪むに足らぬ。

従つて博士の訃音を聞いた歐米學者の何人よりも其の學界の損失を感ずるの深きはデブキソン氏に在つて當然で、本年一月の「ネーチュア」誌上に其の筆に成つた吊辭を見た譯である。氏は歐文詞文だけで四千頁に餘るさといひ、博士の深夜まで孜々研究に耽られた例として、雄の夜半地震の微動を感ずる觀測を擧げてゐる。我々も他の一例として京都に講義の爲め滞在せら

我々の眼前に現はれる博士は大學院學生として、明治二十四年の濃尾震災の時に努力せられた頃から東京地學協會の會務を共にし又た京都大學に地震學の講義に來られた間、或は年を隔て或は月々に接觸して、其の穩健眞率の態度と明快周到な意見に傾倒せざるを得なんだ。然れども今から想ひ起して最も圓熟した博士は大正十一年十二月島原地震の時に唯一回野外の觀察と共にした時であつた。諫早驛で邂逅し路を分つて半島を踏査し、再び長崎の上野屋旅館の樓上で落ち合つたのであつたが、此の觸目當時の所見と其後公にされた報告とは我々を益したものと頗る大で、殊に寛政大變の島原津浪を起した前山崩落の見解の如きは地質家と博士との間に逕庭があつて、我々のみは博士と全く同見となつたのは當時悠悠の間に語られた所が大に興つてゐる。

九月一日の大變後日本全國の人心洶々たる時平生博士の語られた所が此の首都災害の豫告に及ばぬものとして全體の地震學者中ごに博士を非難する民衆囂々の聲を聞いたが、我々の博士が人心動搖の際に一服の沈靜劑として用ゐられた所を是非するのに發憤して、大阪毎日新聞紙上の講演で聊か民衆に逆撃を試みたのは、苟くも博士の平生を知るものならば敢て場當りの詭辯させなんだ筈と信ずる。が此の如き挿話も親しく笑語する機會を永遠に失つた。

原博士は同年の卒業で一高以來の面識であるのみならず、京都大學の文學部史學科の同僚として十年間相語り相評し來つた其の紛糾した萬般の問題を判斷する犀利の識見を描寫して真相を表現する靈妙の文筆とは當代に於て殆ど何人の追隨をも容さぬ所である。我々は人文地理學の一大問題として世界戰爭に注意し大正八年偶然同時に歐洲に在つて而かも何時も前後に英佛獨に入り、終に一夕の歡談をも試むる機會はなかつた。が偶然に集拾した資料が共通なる爲め歸朝後何時も互に融通すると同時に戰爭突發以來の事變の真相を談ひ合つて、何時も大抵所見の偶合に快哉を呼んだものである。

原博士は地理學に關して特に學ぶべき研究はないやうに世人に見られるかも知れぬが、其の秘藏せられる西洋古海圖で羊皮紙に描かれたポルトガル *Portugal* 即ち譯して港灣圖といふべきものが博士に葡萄牙交通時代の地理研究を試むる好奇心を刺戟したもので、當時の南洋地方地名の考證に着手され、後大正二年に旅行もせられ、南海一見と題した旅行記を公にせられる動機ともなつた。今京都大學地理學教室に集めた日本現存ポルトガル複製圖は其頃に東京で自ら監督して撮影したものである我々のライブラリで獲た第十六世紀のポルトガル二幅は大に博士の興味を惹き、其の他の第十六世紀古地理書も同じく博士の利用さるべきを期待した。然るに今や我が教室及び筆者個人の圖書に對して此の知音の人を失つた嘆を禁ぜぬ次第である。

原博士の南國一見は勿論「藝文」を飾つた「實院の春」と題する支那旅行の即興の紀行文の如きも清眼の精透な着想の警新な著

### 震災後の悲しい追憶

筆の靈妙さが何人をも魅するに足るものがある。又た最近世史の研究者として本邦唯一の權威であつたから、最近の歐米諸國外交關係の機微を穿つた外交時報其他史學の諸雜誌に載せた諸稿何れも外國地誌を講ずるものを裨益する所頗る多かつた。

神保教授は兩博士の永逝の後を追ふて原博士と同じく本年一月道山に歸へられた。博士は東京大學地質學教室で少壯歸朝の助教として初めて礦物學を講ぜられた時に自分は其の講筵に陪し、兩來師友として益を受けたこと三十年の久しきに及んだ其の就任當時の年少氣鋭で長足を利用し秩父山中の溪流を死渉して稀少な學生を後に墮落たらしめた笑話是有名である。

博士の一生を通じて旅行といふことが最第一の快樂であつたらしく、大學の教鞭を執られる前に、北海道技師として北米のパンペリー、ブレイク、ライマン等地質家の部分的調査のあつた外殆ど全く原始林に蔽はれた帝國一大版圖の地質調査を擔當せられ、僅かに四年間に一通り地質圖まで作製せられた如き、常人には全く出来ぬ所を成功された。元來日本は英國など、同じく岩石露出の悪いので地質學者を惱ませる國であつて、度々朝鮮や支那の裸の山を見たらば頓に内地地質調査の苦痛を増すの感が起る。北海道は更に困難の程度大きく、森林を穿ち熊笹を分けての調査であるから、着手當時の交通不便な事情に於て此の事業は何人も想像し能はぬ困難があつた。博士の健脚と冒險旅行趣味がなかつたならば恐らくは調査十年を經ても纏らなだらう。

博士の此の一種の道樂が驅つて留學歸途のシベリア横斷旅行

日清戦争後の遼東半島旅行、日露戦争後の樺太旅行、世界戦争中の浦鹽旅行等を試みしめたもので、内地に至つては殆ど足跡を印せざる處なしといひ得べく、暗室に籠つて測角器を弄する如き研究を屑させぬやうに世人から誤解されても博士が一生之を厭せんのだのは恰かも煙酒に淫するもの、之を禁じ能はぬ如き觀があつた。

神保博士は此の如き廣い趣味を持たれたから、北海道採集化石を携へて伯林に入りゲーメス教授の下に白垩紀化石を研究せられ一大論文を纏められる片手間に、クライン、リンネの礦物學岩石學リヒトホーフエンの地理學の講述に與られたのである。自分の東京へ學で博士の數を受けたのは礦物學結晶學であつた筈で、實は地理學の指導を受けて新版圖臺灣の地誌を纏めよと勸誘せられ、卒業論文を草する前に半年の短時日で臺灣諸島誌を編纂したのは全く博士の指導に出たのである。又其の後地質調査所に入り東京地學協會の地學雜誌編輯を擔當するに至つてからも十一年間博士の親交を辱くし、京都に來た後交通は繁くなかつたが、昨年一夜突然河原町の寓居を訪はれて縱談夜半に及んで、平生の元氣は依然として座を歴し歎を釋くした。

未だ年を出ずして重患に罹らるゝことは眞に意外で、昨年八月東京地學協會の山口縣下開催講演會開會間際に突然病氣であるから代れとの電報を協會から受けた時には肥滿の先生恐らくは我々と同じく山口地方の暑熱に閉口された假病でないかと思半信半疑の間に在つた位で、福地理學士から其の重大なるを聞いて驚き、一月出京して柩を拜しても區終に會はなんだ自分には未

だ假死で何處に隠れて我々を潜いてゐるのでないかとすら想はれた。

神保博士の天稟は其の頭も口も手も足も共に敏捷といふ一語で蔽はれ、一を開いて十を知るのみならず、一を語る中に十を含み、ウツカリすればさんでもない皮肉の意味に一杯喰はされる位で、目に觸れた礦物の記事の如きは立るに出來て、幾多の日本産礦物が博士に發見せられ、記載せられたのは其の當然の結果とし我が學界を裨益したことは言ふまでもない。或る人は誹謗して荒ら削りに過ぎぬといふかも知れぬが、其は拙速を排し巧速を誇る人の言に過ぎずして、我々の如く荒ら削りの作品も容易に出來ぬ後輩から觀れば、博士の後を襲ぐ守成の人が其の創業の功を完くする責任を負ふべきであるまいか。

要するに地質學草昧の日本地質學者として斯の人なかる可らざる時代の要求に生れた大家で、我々は博士の脚力稍衰へて此から研究室に坐し微に入り細を穿つ事業に着手せられんとする後半生に研究さるべき材料が今方に集つた處で、突然天壽を假さなんだことが何よりの學界の損失であつて、又た我々後輩の痛恨に堪へぬ所である。

震災の後に自分の親愛と畏敬し又た打ち解けた意見を交換して益を受けんとする三つの異つた方面の學者が連續して世を隔つるに至つたことは自分として筆を執つて一片獻芹の微意を表する勇氣すらならしめる次第である。